

LINKAGE

[繋ぐ]

愛でる Special Issue:

重なり合う光を表現する 紙と金のジュエリー

先どる 社会問題の解決から生まれた
国産竹を原料にした「竹紙」

訪ねる+ アートを通して紙の魅力を発信する
「ふじ・紙のアートミュージアム」



表情豊かな光沢を纏う 紙と金のジュエリー

光によって表情を変える繊細な光沢と奥行きある気品を放つ、均整の取れた美しいアクセサリ。一見すると、貴金属のように硬質な素材でできているように思えますが、実際に手にしてみると思ったよりも軽やかで、その質感は柔らかな印象を受けます。この「ikue(いくえ)」と名付けられたアクセサリは、その名のとおり幾重にも束ねられた紙から創られたもの。放射状に広げた紙の断面に、本の製本技術である三方金加工を施すことで、伝統的な技術と新しい時代のセンスが融合した、新しい付加価値を生み出しています。日本のみならず海外でも注目を集めるこの“紙のジュエリー”の魅力について、創作者である2人のデザイナーの言葉とともにお伝えします。

国際紙パルプ商事(KPP)が発行するTSUNAGU(繋ぐ)は“紙の魅力再発見”をテーマに、紙と文化・紙と事業・紙と人を「繋ぐ」広報誌です。

愛でる P01

表情豊かな光沢を纏う
紙と金のジュエリー

拓く P06

貧困問題解消に向けた
食糧支援をスタート

先どる P07

社会問題の解決から生まれた
国産竹を原料にした「竹紙」

訪ねる+ P09

アートを通して紙の魅力を発信する
「ふじ・紙のアートミュージアム」

伝える P11

出版界の名伯楽から送られた
思いやりに溢れた1通の手紙

深める P13

KPPグループの最新ニュースを
キャッチアップ

PAPER TOPICS P14

飲食時の飛沫感染リスクを減らす
紙製マウスガード

訪ねる P15

新たなコミュニケーションを生み出す
注目のブックカフェにフォーカス

作る 付録

月の満ち欠けがひと目でわかる
「卓上ムーンカレンダー」

紙から装飾品をつくるという新たな領域を開拓した 日本発の美しいペーパージュエリー

アクセサリーの素材として一般的に用いられることのない紙を使って、まるで貴金属や宝石のような奥行きのある輝きを表現するジュエリーブランド「ikue」。重ねられた約100枚の紙を360度に広げ、その断面に「三方金(さんぼうきん)」という本の加工を施すことで、紙の地色と金色の箔が調和した繊細な色彩を表現しています。そのソリッドな美しさはもちろんのこと、一見すると紙からできているとは思えない意外性や、製本技術に応用したもののづくりのプロセスが注目を集め、感度の高い人々を中心に海外にもファンを広げています。

「普遍的な価値の続くプロダクトをつくりたかったんです」。そう話すのは、このikueブランドを立ち上げた株式会社TANT(タント)の原田元輝さん。多摩美術大学プロダクトデザイン学科を卒業後、大手オーディオメーカーに就職した原田さんは、音響機器のデザインを担当するインハウスデザイナーとして活躍。独立後、家電などの商品開発に携わるなかで、次々とアップデートされていく技術に対応した革新的なプロダクトだけでなく、今ある技術の価値を再解釈することで新しい可能性を拓くものづくりに挑戦したいと思うようになったそうです。

新たな挑戦のパートナーとして声を掛けたのは、大学在学中からの友人であり、広告・映像・空間な

と多岐にわたるジャンルのグラフィックデザイナーとして活躍していた横山徳さん。「自分たちの手で新しいものを生み出したいという思いを持っていた」という横山さんは、原田さんとともにデザイン事務所を立ち上げました。

2人の若いデザイナーが「ikue」の商品開発に取り組みきっかけになったのは、「東京ビジネスデザインアワード」というコンペティションへの参加。これは、東京都内にあるものづくり企業とデザイナーのマッチングによって新たな可能性の創出をめざして開催されており、デザイナーは選出された企業と協働して、その素材や技術力を生かした新しい商品やビジネスを提案するというものです。原田さんと横山さんは、公募されたテーマの中から「三方金加工」という伝統的な製本技術に着目し、この技術に応用した商品展開とブランド構築を模索することになります。「三方金加工とは、本にある3つの断裁面に箔を施す技術で、紙の変色や収縮、虫害や汚れを防ぐ目的で主に聖書や手帳などに用いられています。「三方金」という古くから受け継がれてきた技術の特長を再構築して新たな価値を生み出してみようと思いました。初めは紙以外の素材に技術転用して、家具や雑貨をつくらうと考えたのですが、最終的には素直に紙を主役にしたアクセサリー

をつくることにしました。紙は身近なものだし使い終わったら廃棄されてしまうもの。だからこそ、人々に驚きを与えたり、新しい価値を生み出せるんじゃないかと思っただけです。それに、プロダクトとグラフィック出身という2人の強みを生かす意味でも、平面と立体のどちらにも生かせる紙を選ぶことにしました」と原田さん。2人の提案する、三方金の技術に応用したペーパージュエリーブランドは、華やかさと繊細さを兼ね備えた商品として高く評価され、最優秀賞を獲得。これを機に製品化に向けて動き出すことになりました。



Diamond (カラー:Gradation)



Cone (カラー:Dark 2)



Drop (カラー:Blue)



STRAIGHT (カラー:WHITE)



THIN (カラー:Gradation)



ikue Art Flame (カラー:White)



持続可能な社会実現に向けた、KPPグループのあくなき挑戦をご紹介します

KPP Sustainable Times

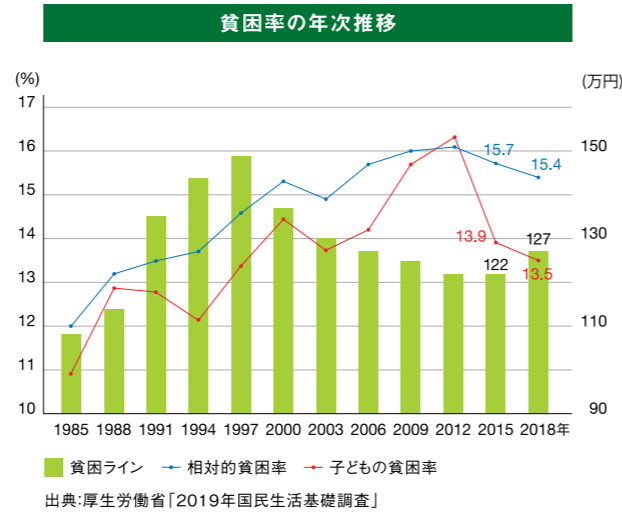
セカンドハーベスト・ジャパンを通じた食糧支援を実施

日本では、さまざまな理由で膨大な食糧が廃棄されてしまうフードロスが問題になっています。しかしその一方で、貧困により十分な食事をとることのできない人々も存在します。厚生労働省の「国民生活基礎調査」によると、日本における相対的貧困率*は15.4%（2018年／右表参照）とされています。つまり日本のおよそ6人に1人は、相対的貧困の状態にあります。

当社は災害などに備えて米やパン、缶詰などの保存食を備蓄していますが、賞味期限が近付いたこれらの保存食を「セカンドハーベスト・ジャパン」（東京都認定特定非営利活動法人）を通じて困窮状態にある方々へ寄贈することとし、第1回目を8月20日に実施しました。これらの食品は児童養護施設や母子支援施設などの福祉施設・団体及び生活困窮者個人へ配布されます。

当社は今後もこの取り組みを継続し、貧困問題の解消に貢献してまいります。

※生活状況が自分の所属する社会の大多数よりも、相対的に貧しい状態にある人の割合。



セカンドハーベスト・ジャパンとは？

企業や個人などからまだ食べられるにもかかわらず廃棄される食品を引き取り、困窮者の元に届ける活動を行っている東京都認定特定非営利活動法人（認定NPO法人）。2000年から活動を開始し、東日本大震災や熊本地震などの災害時には炊き出しや支援物資の提供も行いました。

セカンドハーベスト・ジャパン HP: <http://2hj.org/>



EcoVadis社のサステナビリティ評価において「ブロンズ」を獲得

当社は包括的な企業の社会的責任（CSR）評価サービスを提供するEcoVadis社のサステナビリティ調査において、「ブロンズ」の評価を獲得しました。EcoVadis社は、企業の環境・社会的慣行の改善をめざして、ESG関連の取り組みを評価するプラットフォームを提供し、「環境」「労働と人権」「倫理」「持続可能な資材調達」の4分野における企業の方針・施策・実績

について評価する機関です。世界160カ国、200業種、75,000以上の団体・企業が評価を受けています。

当社は今回の評価の結果「ブロンズ」を取得しました。今後も社会からのESGに関する要請に応えながら、さらなる企業価値向上をめざして参ります。EcoVadis社 HP:<https://ecovadis.com/ja/>



「アートを創作する使命感みたいなもの」（横山さん）という思いから創作しているという、端材を使ったアート作品。



型抜きや金付けは機械で行うものの、金具の取り付けなどはすべて手作業。熟練の職人技が必要とされる。



製品化に向けて試行錯誤を繰り返しながら製作した「ikue」のプロトタイプ。



(上)アトリエの内観。(中)オフィスのエントランスに展示されている「ikue」ブランドのジュエリー。(下)右:代表の原田元輝さん 左:共同代表の横山 徳さん。

コンペティションで最優秀賞を獲得したものの、ペーパージュエリーを製品化するには、乗り越えなければならぬハードルがいくつもありました。「コンペで協働したメーカーでは、コスト的にも体制をつくるのが難しいということだったので、まずは製造を請け負ってくれるパートナー企業選びからはじめる必要があります。紙の特殊な加工技術が必要になるため、企業探しは難航。ひたすら面会を繰り返すなかで、最終的に特殊製本で有名な篠原紙工さん（東京都江東区）を紹介していただき、ikueの製造をお願いすることができました。社長の篠原さんはデザイナーの思いを大切にしつつ「一緒に最善の方法を考えてくれる方で、箔押し加工の美箔ワタナベさん（東京都荒川区）を含めたプロジェクトチームをつくることができました」（原田さん）。製本、箔押しの分野において、クリエイターや装丁家、編集者から名指しで指名を受けるほどの高い技術力を持つ2社の全面協力を受け、原田さんと横山さんの「ikue」製品化に向けた活動が本格化していきました。

次に2人が取り組んだのは、「ikue」に使用する紙を選定すること。「紙は、銘柄によって糊や箔の乗りが変わってくるので、特に時間をかけて選びました。耐久性も考えて、ユボ紙やワックスーパーも選択肢として考えましたが、自分たちが表現したい色が出せるかどうかを優先することにしました。また、紙が厚すぎると三方金の繊細な美しさが損なわれてしまうので、ジュエリーらしい華やかさを表現できるもので、なおかつ色のレンジが広い「サガン」と「ジェラード」という紙を採用しています」（横山さん）。同様に、軸と紙をきれいに接着するための糊も重要な要素だったそうです。「このikueは、糊を厚く塗ってしまうと円周が大きくなってしまっ紙の枚数が増えてしまうので、いろいろな固定方法の検証を篠原紙工さんと繰り返ししました。最終的には均一な開きが実現できて、経年劣化が少なく耐久性に優れているPURという糊を使うことにしました」（原田さん）。また、水に弱いという紙の弱点を補うための耐水実験を経てフッ素コーティング剤を使用するなど、新たな課題を「ひとつクリアし、約2年の歳月をかけてようやく製品化を実現できました」。

完成した「ikue」は、2018年・19年1月にフランス・パリで行われたインテリア&デザイン見本市「メゾン・エ・オブ・ジェ・パリ」、5月に東京で開催された「インテリアライフスタイル」に出展。その均整のとれたデザインと陰影の美しさ、紙をジュエリーにするアイデアから注目を集め、2018年には国際的なデザイン賞のひとつであるDFA Design for Asia Awardsのブロンズ賞を獲得し、世界的にも高い評価を受けています。「手にして初めて、紙でできているということに驚く方が多いですね。それから意外だったのは、男性の方が多く購入されていること。男性が女性にプレゼントしたくなる商品なのかもしれませんね。紙婚式や結婚記念日など記念日の贈り物やドレスアップした日のアクセントとしてもおすすめです」。

株式会社TANT

プロダクトデザイナーの原田元輝さんとグラフィックデザイナーの横山 徳さんが設立した、クリエイティブワーク全般を手掛けるデザイン事務所。単にデザインを提供するだけでなく、本質的な課題解決や潜在的価値の発掘など、クリエイティブの視点からモノの魅力を引き出す表現方法を共創する。

- 株式会社TANT:<http://tant-inc.co.jp/>
- 「ikue」ブランドサイト:<https://ikue.work/>
- 「ikue」オンラインストア:<https://ikue-shop.com/>

「ikue」ブランドの商品は、オンラインストアのほか、国内外のインテリアショップやミュージアムショップでも購入いただけます。取り扱いショップの詳細は、「ikue」ブランドサイトにてご確認ください。

※結婚して1年目の記念日。



「MEMO TOWER kit」
6種の丸形カードが印刷されたシートと竹の形を模倣した筒状ケースのセット。
(シート:60枚、ケースサイズ: Ø75mm ×100mm)
※カラーは、ホワイトとナチュラルの2色。



「レターセット」
竹をカットしたようなデザインの手紙と便箋のセット。
(6枚入り、サイズ:220mm×90mm)
※カラーは、ホワイトとナチュラルの2色。



「TANZAKU」
竹にまつわるグラフィックで彩る5色の短冊。
(5色×3パターン×各2枚の計30枚)



「ORIGAMI SATOYAMA/PANDA」
里山の生き物とタケノコを収録した「SATOYAMA」と、バンダとタケノコを収録した「PANDA」の折り紙。
(各5種×3枚の計15枚セット)



「竹紙100ノート/バンダ」
「ソーシャルプロダクツアワード」を受賞した高品質ノート。(A5サイズ・30枚) ※カラーは、ホワイトとナチュラルの2色。



「B5 NOTE BOOK」
竹をイメージした1mmドット方眼が施されたB5サイズのノート。
丸めると竹筒のように見える。(B5サイズ・80枚) ※カラーは、ホワイトとナチュラルの2色。

「竹紙」の見本帳を
無料でお届けします

中越パルプ工業(株)の竹紙を収録した見本帳を無料配布しています。ご希望の方は、1枚から紙を買えるネット通販「PAPER MALL」からご注文ください。
※無料配布のため、お一人様1冊まで。

「PAPER MALL」
www.kpps.jp/papermall

ペーパーモール 検索



社会問題の解決から生まれた、国産竹100%を原料にした「竹紙」

カゴやザルなどの日用品や工芸品をはじめ、正月の門松、タケノコなど、竹は日本人の生活文化と密接な関係にあります。しかし近年では、竹製品がプラスチック製品や安価な海外製品に代替されるようになったことで生産量が激減。適切に管理されない放置竹林が増えた結果、成長の速い竹は隣接する森林や里山を侵食し、森の多面的機能や生物多様性を脅かすなどの問題が起きています。放置竹林が大きな社会問題となるなか、竹の有効活用法として大きく注目されているのが、中越パルプ工業(株)が製造・販売する「竹紙」です。この「竹紙」は環境分野での有益性が高く評価され、「第8回エコプロダクツ大賞」農林水産大臣賞をはじめ、これまで数々の賞を受賞。また、国産竹100%の紙としてだけでなく、その魅力を伝えるために立ち上げたペーパーブランド「MEETS TAKEGAMI」も、環境問題の解決につながるプロダクツとして大きな話題を呼び、今年9月、Japan Times社が主催する「ジャパンタイムズ Sustainable Japan Award 2021」Satoyama部門において特別賞を受賞しました。里山の資源活用、地域の循環型経済に貢献する同社の取り組みについて、営業企画部長・西村 修さんにお話を伺いました。

——「竹紙」を開発することになったきっかけを教えてください。

当社の川内工場がある鹿児島県は竹林が多く、その面積は全国の約1割を占めています。タケノコ農家も多く、整備のために伐採した竹の処分が困っていると相談を受けた当社の原料集荷担当者が、「ジブンゴト」として自分の職域の範囲で解決を図ろうとしたことで、厄介者だった竹を紙の原料に活用するアイデアが生まれました。当初は名もない紙でしたが、その背景に着目して私が「竹紙」と名付けました。

——「竹紙」の製品化にはどのような苦労がありましたか？

竹は、内部が空洞になっているので一度に運搬できる重量が少なく、木材と比べて生産量が劣ります。また、竹は強靱なため、チップ製造時に使用する切削ナイフの寿命が短くなる。こうした課題を解決するために、運搬方法の改善や耐久性の高いナイフへの切り替えなど工夫を凝らし、業務の効率化に関係者と進めてきました。

——原料となる竹の選定基準を教えてください。

集荷する竹はおもに孟宗竹、一部真竹も受け入れています。腐ったものや枯れたものは使用せず、決められた長さや径級のものに限定するなど、木材パルプ材と同様、受け入れ基準に沿った竹のみを使用しています。

——「竹紙」にはどのような特徴がありますか？

竹の繊維は細くて長いという特徴があります。繊維の長い針葉樹は丈夫な産業用紙に、繊維の短い広葉樹はきめ細かく表現する印刷用紙に用いら



伐採された竹は集荷されてチップ工場へ。チップングした竹チップはバッチ釜と呼ばれる蒸解釜でパルプ化されたのち、抄紙工程を経て「竹紙」が完成する。

中越パルプ工業株式会社

ちゅうえつばるぶこうぎょう かぶしがいいしゃ
1947年創業の総合紙パルプメーカー。新聞・印刷・包装用紙、特殊紙、製紙用パルプの製造のほか、国産竹100%を原料とした「竹紙」、近年では未利用材を主原料とする木質バイオマス発電や高機能新素材セルロースナノファイバーの開発など、「紙」を通じた社会課題の解決、持続可能な社会実現に向けた事業を幅広く展開する。

中越パルプ工業株式会社HP
<http://www.chuetsu-pulp.co.jp/>

れますが、竹は中間的性質を持ち併せています。「竹紙100」という銘柄の紙は、「ナチュラル(茶色)」は平滑性に優れ薄くても存在感のあるバリッとした質感。「ホワイト(白色)」は透かすと少しだけムラがあり、柔らかな質感と趣ある風合いが特長です。

——「MEETS TAKEGAMI」のコンセプトを教えてください。

この「MEETS TAKEGAMI」は、「竹紙」と社会の接点を増やすためのアクションの総称です。私が10年前に企画販売した「竹紙100ノート」は、銀座伊東屋や美術館でも販売され高い評価をいただきましたが、それだけでは限定的な目的しか果たしていません。商品を購入していただくことが主な目的ではなく、商品があることによって、地域の課題解決のために生まれた「竹紙」の存在や私たちの取り組みを知っていただくこと。また、それに共感していただいた方が新しいソーシャルグッドな行動を起こしてほしいという想いのもとに、この「MEETS TAKEGAMI」プロジェクトを立ち上げました。「竹紙」をより多くの方に知っていただくために、現在ご好評いただいているノートなどの紙文具から、折り紙や短冊などの多くの人が参加できるイベントやワークショップに活用できる商品へシフトしています。

——「minna」さんによるデザインが好評を博しています。

デザインチーム「minna」さんと長時間お話しする機会があり、それを機に協業していただいています。「minna」さんは単にデザインを整えるだけでなく、私がやろうとしていることを整理して一緒に考えてくれる頼もしいパートナーです。最終的なデザインはおまかせしていますが、コンセプトづくりや商品企画では互いにアイデアを出し合い、活動を進めています。

——最後に読者へのメッセージをお願いします。

「竹紙」はとてもユニークな存在かつ、素晴らしい取り組みから生まれた紙です。まずは実際に手にして楽しんでいただくこと、また「竹紙」が誕生する背景にも注目していただき、読者のみなさん自身が社会に貢献できる良いアクションを起こしていただければうれしく思います。

RECOMMEND SPOT

ふじ・紙のアートミュージアム

展覧会

幅広いジャンルの紙製アート作品を展示

自然光を取り込む3面ガラス張りの展示スペースでは、年4回のペースで企画展を開催。2016年11月の「日比野克彦展」を皮切りに、これまで18の展覧会が開かれています。展示作品は、立体造形、インスタレーションなどのファインアート作品を中心に、紙の特質を生かした幅広い作品を展示。また、これまでに市内の企業とコラボレーションした企画展を2度開催し、トイレトペーパーなどの芯に使われる紙管で制作した作品を紹介することで、紙に対する新しい視点や可能性を提示する試みも行われてきました。交流スペースでは、富士市に関わりの深い作家のペーパー作品や地元の製紙会社の製品などを紹介するほか、アーティストの創作風景やインタビューを編集したビデオ上映を行っています。紙の新たな魅力に触れる多様なプログラムを楽しめます。



[右上]紙の美「断」(2017/6.14~8.27) [右下]広瀬 護展(2017/2.23~5.28)
[左上]日比野克彦展(2016/11.1~2017/1.30) [左下]紙の美スパイラル(2019/9.23~10.27)

これまでに開催した展覧会

日比野克彦展／広瀬 護展／紙の美「断」／友田多恵子展／秋山信茂展／北山善夫展／藤原志保展／渡辺英司展／志村陽子展／本堀雄二展／紙の美 スパイラル／第11回 紙のアートフェスティバル 高木健一展／佐々木昌夫展／4周年記念 パネル展／第12回 紙のアートフェスティバル 特別展／寺内曜子展／岸野ひと美展／「動いている人」武蔵野美術大学 彫刻学科 授業【基礎造形】作品展示

イベント

知的好奇心に応えるプログラムを実施

作品を出展する作家本人が作品を解説するアーティストトークのほか、作品とコラボレーションしたダンスパフォーマンス、専門家による講演・対談など、紙の特性や魅力をより深く知るためのイベントを実施。文化施設を巡るバスツアーなど、舞台を館外に移して行うプログラムも実施されました。



静岡大学客員教授・平野雅彦氏を講師に迎えた「アートマネジメント」をテーマにした講演会

ワークショップ

紙を素材にものづくりを楽しむ

展覧会と連動した企画として、紙を使ったクラフトワークが楽しめるワークショップも開催されています。作家本人から直接アドバイスを受けることができる人気プログラムです。過去には紙管を使った楽器づくり、新聞紙からバッグをつくるワークショップなども行われました。



段ボールを素材に写真立てをつくるワークショップ

公募展

第13回 紙のアートフェスティバル2021 渋田薫展

- 会期／開催中～12月12日(日)まで
- 開館時間／10:00～18:00
- 休館日／10月18日(月)、11月15日(月)・16日(火)
- 観覧料／無料
- 問合せ先／TEL:0545-32-6581



写真は、第11回紙のアートフェスティバルで大賞を受賞した高木健一さんの作品

全国公募から選ばれた大賞作品が決定

ふじ・紙のアートミュージアムでは、紙の特質を生かし、新たな可能性を探るため、紙を素材にした作品を全国から公募する「紙のアートフェスティバル」を開催しています。13回目を迎えた2021年は、地元の和紙、駿河柚野紙を基本とした渋田 薫さんの「Rockふじ」が大賞を受賞。富士市の紙の歴史や文化、気候風土も取り入れながら構想された作品を間近で鑑賞することができます。

MESSAGE

当施設では、「つなげる・つながる」をテーマに、富士市全体がミュージアムになることを願い、さまざまな芸術文化活動を展開しています。展覧会をご覧いただいたお客さまからは、日常生活にある身近な紙がさまざまなかたちで作品の素材として使われているのを見て、紙の新たな可能性・魅力を感じたなどの感想をいただいています。今後は和紙・洋紙など完成された紙を使った作品でなく、紙の原材料などを使った作品などの展覧会も企画しています。紙のまぢだからこそ生み出されたアート作品の数々、また文化芸術の香りのするまち・富士市を感じていただけたらと思います。

ふじ・紙のアートミュージアム 館長 漆畑勇司 さん

紙を素材にしたアート作品を通して 紙の魅力や新たな可能性を発信する

富士山麓から湧き出る良質で豊富な水資源と温暖な気候、原料となる木材を運ぶうえでの流通の要衝といった利便性を背景に、古くから製紙産業が発達してきた静岡県富士市。「ふじ・紙のアートミュージアム」は、今もなお多くの製紙工場が集積し、衛生用紙では国内屈指のシェアを誇る文字通り「紙のまち」にあります。富士市制施行50周年の節目にあたる2016年11月に開館した同施設は、紙の多様性を表現するミュージアムとして、年間約1万人の来場者を集めています。館内では、紙製のファインアート作品の展覧会を軸に、出展作家や専門家を招いて行われるトークショーなどのイベント、誰もが創作する楽しみを体感できるワークショップなど、紙の新たな魅力に触れるためのさまざまなプログラムが催されています。「ふじ・紙のアートミュージアム」は、市民の芸術文化振興を目的とした富士市文化会館ロゼンアター内に併設されていることもあり、地場産業である紙文化の理解促進といった役割も担っています。これまでに、市内にある企業の紙製品を使ったアート作品を展示する企画展も開催しています。また、富士市では2009年以降、全国から紙の特質を生かしたアート作品を公募する「紙のアートフェスティバル」が毎年開催され、2019年からは「ふじ・紙のアートミュージアム」を会場として入賞作品の特別展示が行われています。昨年は、コロナ禍の影響に伴い募集を中止し、地元作家13名1グループによる特別展として開催した紙のアートイベント。今年の大賞作品を、ぜひ間近でご覧ください。

ふじ・紙のアートミュージアム

- 主催：富士市
- 主管：一般社団法人富士芸術村
- 住所：静岡県富士市藤原町1750 富士市文化会館ロゼンアター1F
- 開館時間：10:00～18:00
- 観覧料：無料
- 休館日：富士市文化会館ロゼンアター休館日
- 問合せ：TEL:0545-32-6581 ●HP：https://fuji-paperart.jp/



※感染症拡大の影響により変更になる場合があります。詳細はHPにてご確認ください。

「手紙」は語る

植村 鞆音

人間は表現する動物だというのが、手紙は人間の表現のなかでもっとも深く高貴なものだと思う。手紙は手書きがいい。眼光紙背に徹すれば、書き手の人となりが見えてくる。

第二十六回 粕谷一希

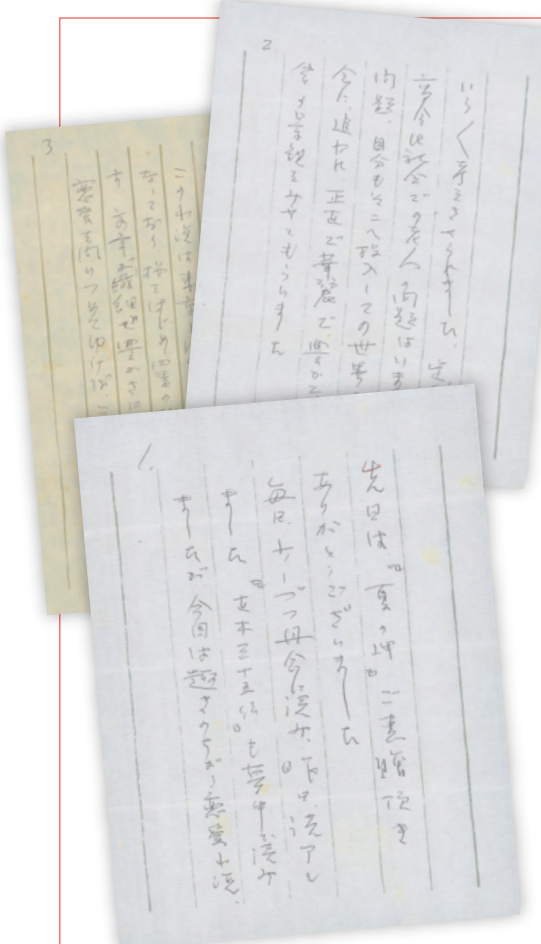
粕谷一希は、昭和四十二年以降長いこと「中央公論」の編集長だった。五十三年退社後も「アステイオン」「東京人」などの編集長を歴任し、平成二十六年八十四歳で亡くなった。業界の名伯楽といわれ、高坂正堯、塩野七生、山崎正和、白川静などを世に送りだし、戦後日本の論壇に保守、現実の潮流を築いたといわれる。

わたしは晩年の粕谷さんの知己を得たが、ボケも手伝って、誰に紹介されたのかいから思い出そうとしても判然としない。中央公論とは浅からぬ縁があった。父の晩年の著作が中央公論社から出版され、その縁で他社から出版されたハードカバーの多くが死後同社で文庫本化もされた。編集者、校閲者とも関係が深まり、息子であるわたしの著作の出版まで同社の世話になった。しかし、その関係者から粕谷さんを紹介してもらった記憶はない。

いや、中央公論との関係はそれだけではない。父が旧制高等学校の教師をしていた関係で同社の編集者だった網淵謙鋭、利根川裕、両氏とは親しくさせていただいたが、彼らに粕谷さんの紹介を受けた記憶もない。後に、わたしの文筆業のいわば後見人といつてもいい、父の教え子である丸谷才一さんと粕谷さんが親しいことを知ったが、それはわたしが粕谷さんの知己を得たあとのことなので、丸谷さんから紹介されたのではないことも明らかだ。

学賞に名を残す小説家だった。その伯父に容姿も性格もそっくりだと小説家の弟である父にいわれながら育った、ただそれだけの理由で。第二作が伯父の評伝『直木三十五伝』、第二作が生涯「教師だった父の評伝」歴史の教師 植村清二だった。この二作がたまたま小さな文学賞を受賞したことではわたしには思いあがりがあったのかもしれない。わたしは、第三作は小説に挑戦してみようと思いつき、サラリーマンを定年退職したばかりの、しかも妻子持ちの「私」という一人称の老人が山形の海岸でナンパした大学を卒業したばかりの若い女性に恋をして、東京からポルトガルまでの道行きを日記風に描いたのだが、むろんたいした小説であるわけではない。主人公の道行きの行きつく先はヨーロッパ大陸の最西端、サンタ・クルスとロカ岬である。主人公二人は檀一雄が愛人の少女と暮らした町の海岸で檀の俳句を彫った碑に出会う。「落日を拾いに行かむ海の果て」。わたしは主人公の名残りの日々を象徴的に表現しようと夕陽の沈むシーンをいくつか描いた。粕谷さんは、檀の俳句をとりあげ、わたしの拙い文章をまず優しく肯定してください。これが編集者、あるいはプロデューサーなどの必須ともいえる資質といつていい。そうでなければ、伯楽の下に名馬は結集しない。そして、こう続ける。

「ただ、作者の有能へいや破綻のなきが逆に邪魔して、主人公も千也子(千矢子)も存在感が希薄になっていくことも否めません。小説はもつとのつびきもあれてよかったのか、若干気にかかります。ともかくよく描きこまれた



わたしは粕谷さんからわたしの書いた(現在のところ)唯一の小説に関して丁寧な手紙を二通頂戴している。

「先日は『夏の岬』のご惠贈頂きありがとうございます。毎日、少しずつ丹念に読み、昨日読了しました。『直木三十五伝』も夢中で読みましたが、今回は趣きのちがう恋愛小説。いろいろ考えさせられました。定年後高齢化社会での老人の問題は、いまや社会問題、自分もそこへ投入しての世界を丹念に追われ、正直で華麗で豊かな都会の景観をみせてもらいました。落日を拾いに行かむ海の果て。なる句は私も大好きで檀一雄を安吾の並流かと思いついて、彼を見直しました。この小説は東京と海外旅行の案内書にもなっており、桜をはじめ四季の移り行きが鮮やかです。文章が繊細で豊かさに圧倒されました。恋愛を問いつめてゆけば、こうなるのかと納得しました。」

もう詳しいいきさつは忘れてしまったが、わたしはさほど親しいとはいえない業界の大先輩に初めての小説を送って感想を問うたのであろう。われながら少し図々しいかなという気もする。二十年近く前サラリーマンをリタイアしたわたしは、第二の人生を若い頃から憧れた著述業を目指すこととした。伯父が文細密画になっていきます。これからは有能すぎる能力を押さえて直木三十五のような腰の落着け方が肝要に思います。楽しませて頂きありがとうございます。ありがとうございました」

封筒の消印は、平成二十二年四月六日となっている。わたしが小説を上梓したのがその年の二月だから、出版されて間もなく粕谷さんからお手紙をいただいたことになる。手紙を読むと、編集者としてまた著述の先達として著述業を目指す後輩に気を使われていることがよく分かる。おっしゃりたいことは後半部分で、「小説というものはもつと骨太に心理的な葛藤を描くべきだ」という主旨なのだろうと思う。わたしが文章の師と仰ぐテレビ東京時代の先輩もほぼ同意見だった。もつともわたしは、心理的な葛藤なしの恋愛小説を意図的に書いてみたいと思っていたのだが。


いずれにせよ、粕谷さんが著述業を目指すわたしを傷つけないと配慮されていることを随所に感じて頭が下がる。この手紙をいただいた直後だったと思う。粕谷さんと二度池袋の蕎麦屋で夕食を二緒したことがあった。わたしが誘って、店は粕谷さんが決めてくださった。粕谷さんは雑司ヶ谷にお住まいだったから近くて便がよかつたのだろう。料理と酒はすべて旨かつた。話題は手紙の内容とほぼ同じだったような気がする。亡くなったのが五年後の平成二十六年。わたしは、粕谷さんの配慮にもかかわらず気後れが手伝って、その後粕谷さんに距離をおいてしまった。真摯に教えるを乞うていたらいまとは違う執筆人生が拓けていたかもしれない。ときどきそんなことを考える。



かす や かず き
粕谷一希
編集者、評論家
1930-2014

1930年2月4日生まれ、東京都出身。東京大学法学部卒業後、中央公論社に入社。「中央公論」、「婦人公論」、「思想の科学」などの編集者として、23年間を中央公論社で過ごす。この間、永井陽之助、高坂正堯、萩原延寿、山崎正和、塩野七生、庄司薫、高橋英夫、白川静などを世に送り出すなど名伯楽として活躍。1978年退社後、1986年には雑誌「東京人」、「外交フォーラム」を創刊、1987年には都市出版社を設立するなど生涯一編集者として天職を全うした。著作に「二十歳にして心朽ちたり」「戦後思潮」などがある。享年84歳。

写真：読売新聞/アフロ



著者略歴
うえむら とし の り
植村鞆音 エッセイスト

小説家・直木三十五の甥、東洋史学者・植村清二の子として愛媛県松山市に生まれる。1962年早稲田大学第一文学部史学科卒業後、東映を経てテレビ東京に勤務。同局常務取締役、(株)テレビ東京制作代表取締役社長等を歴任。2005年『直木三十五伝』で尾崎秀樹記念・大衆文学研究賞受賞、2007年『歴史の教師植村清二』で日本エッセイスト・クラブ賞受賞。主な著書に『夏の岬』『気骨の人 城山三郎』など。

飲食時の飛沫感染リスクを減らすために開発された 紙製マウスガード「これでEat!!® (い〜と)」

コロナウイルス感染症が依然として猛威を振るうなか、飲食店には感染防止対策の徹底が求められています。多くの飲食店では、手指消毒や手洗いなどの衛生管理はもちろん、3密(密閉、密集、密接)の回避、アクリル板の設置など基本的な対策が行われています。一方、来店客は入店時にマスクを着用していますが、食事の際にはマスクを外してポケットやカバンの中へ。会話のたびに付け直すべきだとはわかっていても、面倒に感じて実行しない方が多いのが実情です。この課題解決のために考案されたのが、紙製の食食用マウスガード「これでEat!!® (い〜と)」です。上下に可動するフラップが付いた立体構造になっており、マスクを着け外す手間を軽減。抗菌紙または抗菌加工された紙を使用するなど衛生面も配慮されていて、肌や鼻に直接触れることがないので息苦しさもありません。さらには、軽量、リサイクルできるといった紙ならではの利点も活かされたアイデア商品です。

このマウスガードは紙製なので、表面に印刷することも可能。オリジナルデザインを印刷すれば、宣伝広告用のノベルティとしても活用できます。この「これでEat!!® (い〜と)」の開発・販売を手掛けるのは、宮崎県宮崎市に本社を構える老舗の紙卸商、株式会社川越紙店です。ご購入は、同社の店頭およびオンラインストアまで。また宮崎県内の大手商業施設でも一部取り扱いを開始しています。



「これでEat!!® (い〜と)」
つくり方の動画はこちらから▶
www.youtube.com/watch?v=FgHxNqf7vw8



INTERVIEW

株式会社 川越紙店
川越 聡 社長

— 開発したきっかけを教えてください。

昨年3月頃から新型コロナウイルス感染症の拡大によって出張や会合の延期や中止が相次ぎ、時間的に余裕ができました。この機会に何か新しいことに挑戦しようと思い、本業である「紙」をベースにしたブラごみを出さない新しい商品開発に取り組むことにしました。

— 苦労したのはどのような点ですか？

試作品第1号は今よりも大きく、また糊やテープを使用するなど量産には向かないものでした。さまざまなペーパークラフトなどを参考に試作を繰り返し、耳にかける輪ゴム以外はすべて紙だけでできる今の構造に辿り着きました。

— こだわったポイントを教えてください。

すべて紙でできている点です。紙はやさしい手触りに加えて、軽い、安価、リサイクルが容易といったさまざまなメリットがあります。用紙の選定でも、さまざまな紙を試すなかで強度と弾力のある紙を選び、抗菌ニス加工を施しています。

— どのような場面での使用を想定していますか？

個人の方はもちろんですが、この商品はオリジナル印刷が可能ですので、飲料メーカーさんなどの広告宣伝を印刷したうえで飲食店へ配布してもらうケースを期待しています。また同時に調理師専門学校などの教育機関で実習時に活用してもらうことも想定しています。調理時に味見をする際、フラップを片手で上げ下げできるので、便利かつ衛生的です。

— 今後の抱負について教えてください。

もちろん、これだけで完璧に感染が防げるわけではありませんが、「これでEat!!®」を使って安全に会食ができる機会が増えることを願っています。「これでEat!!®」は、当社のある宮崎県にちなみ、英語のEat(食べる)と宮崎弁の「これでいいんだ」という意味の「これでいいと」をかけあわせた名前にしました。宮崎でビジネスモデルを確立させ、将来的には全国へ展開していくことをめざしています。

株式会社 川越紙店
宮崎県宮崎市旭1-1-4
TEL 0985-22-7105 FAX 0985-27-8515
川越紙店HP: www.kawagoep.co.jp/
オンラインストア: kawagoep7105.base.shop/

お問合せ

▶ 中国・深圳市に新分公司を設立

当社の中国事業を担う慶真紙業貿易(上海)有限公司(以下、「慶真紙業」)では、昨年10月より現地に根差した紙商事業を展開し、これまでに上海、無錫、杭州、北京、済南に5拠点を立ち上げ順調に業績を拡大しています。これまで華東および華北に拠点を設置し事業活動を展開していましたが、中国三大経済圏のうちの一つである華南市場へのアプローチが十分ではない状況でした。この度、この華南地区にまで事業を拡大させるため、深圳市に「深圳分公司」を新設しました。これにより、華北から華南まで、中国経済を牽引する沿岸部全域をカバーする体制が整ったことになります。

世界最大の紙・板紙市場である中国において、華南地区最大のマーケットである広東省のGDPは2010年から2019年まで一貫して中国首位(中国全体の約11%強)を維持。2019年には全国で初めてGDP10兆元(約170兆円)の大台を突破し、力強い経済成長を続けています。

慶真紙業は、深圳分公司の新設によって中国での取引拡大を加速させるとともに、KPPグループの海外事業における主力企業としてさらなる発展をめざします。

深圳分公司

所在地 深圳市光明区光明街道東周社区環璽大廈11階09室

慶真紙業貿易(上海)有限公司

設立 2010年

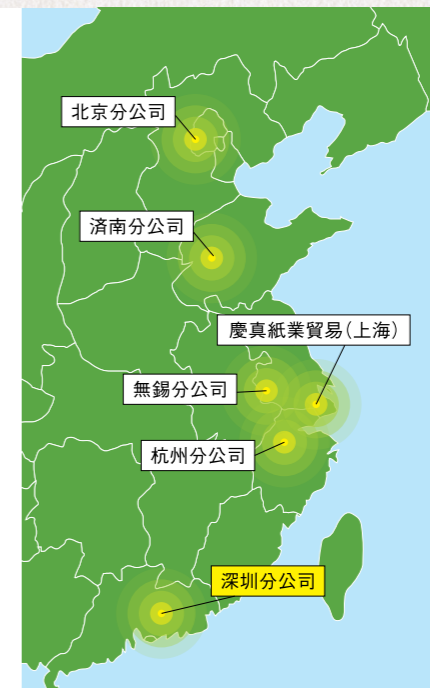
所在地 上海市崑山閘路83号新虹橋中心大廈2801室

代表者 代表人 兼 董事長 顧鈞

事業内容 紙類等の加工および販売

■中国におけるKPPの拠点

- 北京** 2020年11月設立。大手メーカーの各種国産紙を取り扱う。主な市場は北京とその周辺地域。主に出版社や雑誌社などのハイエンド市場がターゲット。
- 済南** 2020年9月設立。主に白カードと白板紙を販売。エンドユーザーは大手製紙会社の薬包印刷工場など。強みは小ロットの分割配送サービスを提供できること。主なサプライヤーは、大手製紙企業。
- 上海** 2020年9月設立(2021年5月に子会社化)。主に国産のコート紙、白カード、印刷用紙、PPCなどを取り扱っており、上海市場向けが多い。物流センターと加工センターを持つ。国内外の有力サプライヤーをベースに販売を展開。
- 無錫** 2020年9月設立。大手製紙会社の製品を主に販売。江蘇省に販売ネットワークを広げ、物流配送システムを自ら構築。倉庫保管、断裁配送などのサービスを提供。
- 杭州** 2020年10月設立。主に出版印刷用紙、包装用紙(食品向け包装紙を含む)を印刷会社や紙製品加工工場に販売。主要なサプライヤーは大手製紙企業。



深圳分公司が入居するオフィスビル

▶ 京都営業部移転のお知らせ

当社京都営業部は、右記の通り事務所を関西支店に移転しました。これに伴い、京都営業部の住所・電話番号・FAX番号は変更となりましたのご案内いたします。

今後とも一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

国際紙パルプ商事株式会社 関西支店 京都営業部

住所 〒541-0052 大阪市中央区安土町1丁目8番6号大永ビル
TEL 06-6271-2295(京都営業部直通)
FAX 06-6267-1070
移転日 2021年8月23日(月)



ブックカフェ デイズ

Bookcafe days

東京都渋谷区鶯谷町15-10

ロイヤルパレス渋谷 1F

TEL 03-3461-1554

営業時間 11:00～19:00

営業日/日・月・火・水曜日

※木～土曜日は、シェアキッチンとして「ペーパームーン」のメニューを提供。

※感染拡大防止対策として、営業時間を変更する可能性があります。最新情報はFacebook、Instagramにてご確認ください。

<http://bookcafedays.com/>



絵本の魅力を再発見できる、大人のためのブックカフェ。

出版業界の売り上げが減少傾向にあるなか、絵本や児童書は着実に売り上げを伸ばしています。少子化により子どもの数が減る一方、コロナ禍の影響もあって自宅過ごす時間が長くなり、親子のコミュニケーションツールとして絵本や児童書を楽しむ人が増えているそうです。

「絵本は決して子どもだけのものではなく、大人でも十分楽しめるもの。その奥深さにぜひ触れてみてほしいですね」。小島ちふみさんが営む「Bookcafe days」は、絵本などの子ども向けの本と季節の手づくり料理を楽しめるブックカフェです。木のぬくもりに包まれるような温かみのある店内には、小島さんが以前から集めていたコレクションのほか、一般のお客さまや絵本作家さんなどから寄贈された、選りすぐりの良書

が並びます。「お客さまは大人の方が中心。ふらっと立ち寄られる方だけでなく、当店のホームページやSNSの情報を見て、日本全国から来てくださる方も多くいらっしゃいます」。

小島さんは「困難な状況にある世界の子どもの力になりたい」との思いから、認定NPO法人 国境なき子どもたちを通して売り上げの一部を子どもたちへの支援に充てる活動を行っています。「飲食や購入していただいた本の代金の一部、お客さまからの寄付金を世界の子どもの自立支援にお役立ていただいています。また、音楽イベントや原画の展示会などのイベントを開催することで、お客さまには楽しい時間を過ごすなかで無理なくチャリティーに参加していただければと思っています

す」。今後は、幼い頃に描いた子どもの絵を本にする手づくり絵本のプロジェクトや、街中にある店に「絵本の棚」を設置し、子どもが気軽に絵本を手にする環境づくりを進めたいと話す小島さん。「子どもは絵本が大好きなので、大人がきちんと渡してあげるかどうかが重要なんです」。Bookcafe daysを利用する常連客には、小島さんの思いに賛同する人は少なくありません。

心に残るミニマムな言葉と想像力をかき立てる美しい絵図、ついつい引き込まれてしまう深い物語性や世界観など、絵本には大人になった今だからこそ気付く魅力があります。コロナ禍のストレスにさらされる日々が続くなか、素敵な絵本との出会いが心を癒してくれるかもしれません。



輸送マイルージとCO2排出を抑え、地球温暖化に配慮したライスインキを使用しています。



針金・糊・熱が不要な製本方法を採用し、リサイクルや怪我の危険へ配慮しています。



国際紙パルプ商事株式会社
KOKUSAI PULP&PAPER CO.,LTD.

発行:コーポレート・コミュニケーション室
〒104-0044 東京都中央区明石町6番24号
TEL (03) 3542-4111 (代)

URL <https://www.kppc.co.jp>